



令和4年度 学校だより 9月号

～ひとがすき まちがすき いわさきの子～

横浜市立岩崎小学校 電話 331-5123 FAX 331-5343



コミュニケーションの大切さ

校長 小林 雅弘

38日間の夏休みが終わり、昨日からまた学校に子どもたちの元気な声が戻ってきました。今年は3年ぶりに行動制限のない夏休みで、家族で出掛けたり、親戚に会いに行ったりなど、楽しく過ごされたご家庭も多かったのではないかと想像します。ただ、一方で様々な状況から、当初の予定が変更になったり、やるつもりだったことができなかつたりしたお子さんもいるかも知れません。そのようなことにも配慮しながら、どのような夏休みを過ごしたのか、子どもたちとのコミュニケーションをできるだけ多くとっていきたいと思っています。

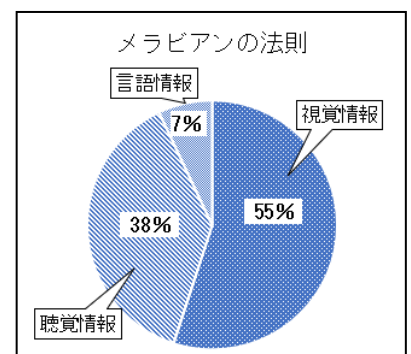
行動制限はなかったとはいえ、新型コロナウイルス感染症 第7波の収束がまだ見通せないなかでの学校再開となります。昨年度は数日間の休校ののち、分散登校での学校再開でしたが、今年度は通常での再開です。子どもたち一人ひとりの健康をいかに守りながら、同時に教育活動を充実させていくかを、強い緊張感をもって考えていく必要があると考えています。

改めて、新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を一変させました。季節にかかわらずマスクをすることが求められ、給食では同じ方向を向いて黙って食べることが当たり前となりつつあります。休み時間もボールや一輪車、竹馬などの用具を使った遊びはなくなり、そのことに対して子どもたちは不満をぶつけてくることもあります。

私が担任をしていた頃は、給食は班のかたちに向きを変え、「今日は1班、明日は2班…」と子どもたちの班を回りながら、楽しく談笑しながら食べていました。休み時間になれば、ボールを抱えて元気に校庭に飛び出していく子どもたちを追って、一緒にドッジボールをするのが当たり前でした。そのような子どもたちとのコミュニケーションを通して、授業だけでは把握しきれない児童理解が教育活動に大きく役立っていたと振り返ります。「一体今は何が『当たり前』なのだろう」と考えさせられる日々です。

コロナ禍において、子ども同士のコミュニケーションが以前と比べ減ってしまっていることは事実だと思います。直接的に話したり書いたりする言語的なコミュニケーションもそうですが、マスクにより表情などが分かりづらいといった非言語的なコミュニケーションの不足は大きな課題であると思っています。

右の図は、アメリカの心理学者であるアルバート・メラビアンによって提唱された有名な「メラビアンの法則」です。これによると人と人がコミュニケーションを図る際、言語情報が与える影響は全体の7%ほどしかなく、視覚情報が半数以上、聴覚情報も含めた非言語情報が9割以上を占めるというものです。人間の成長にとって大変重要な小学校期において、このコロナ禍が今後どのように影響してくるのかはまだ分かりませんが、「自分の気持ちを相手に正しく伝える」「相手の気持ちを正しく理解する」といった双方向の関わりの中で、いかにコミュニケーションが重要であるかを再確認する必要があると考えています。



10月からはスポーツフェスティバルや全校遠足に向けた異学年での活動や個別支援学級や各学年の校外学習なども予定されています。これまで同様、感染症予防の取組を徹底していくことは当然ですが、日々の学校生活の中での教員と子ども、子ども同士のコミュニケーションを大切にしながら、子どもたちの健やかな成長を支える教育活動を進めていきたいと思っています。